

モンゴル牧畜の郊外化における 牧民の原住地に関する分析

An analysis of original living places of pastoralists
on suburbanization of Mongolian pastoralism

尾 崎 孝 宏

はじめに

本論の目的は、ここ10年来モンゴル国で顕著に進行している牧畜の郊外化現象（後述）に関して、新規調査地点のデータ、とくに彼らの原住地と来歴を検討することで、この郊外化現象の理論的一般化へ向けてのパーспекティブを深化させることにある。

筆者は従来、モンゴル国北部のボルガン県中心地周辺での現地調査データに基づき、社会主義時代には周縁的な牧地であった都市空間に近い草原が、とくに社会主義崩壊以降いったんはほぼ壊滅状態に至った地方の流通機構が都市部や幹線道路を中心に再編されていくに伴い、市場に近い生活適地として評価が高まり、結果として牧民が移住・集中していく現象を論じてきた（尾崎 2008）。筆者はこうした現象を「郊外化現象」と呼び、特に2000年以降、社会主義崩壊の混乱が一段落した「ポスト・ポスト社会主義」期に顕著な現象であることを指摘した。また、ボルガン県の現地調査データに基づく限り、郊外在住の牧民には都市からの移住者と周辺のソム・隣県などの遠隔地からの移住者が存在するが、家畜頭数や社会的ネットワーク・地位などから判断する限り、郊外での地域社会の中心的存在は都市から移住してきた人々であることを明らかにした。

もちろん、郊外化現象は、筆者が現地調査を行ったボルガン県に限定された現象ではないことは明らかである。もっとも顕著かつ大規模な事例は首都

ウランバートル周辺に見出しうるが、そのほかにも県中心地、一部の鉱山町など都市的なインフラを持つ空間の周囲では、同様の現象が展開しているものと想像される。ただし、そこでの郊外化の担い手となる牧民の原住地や来歴、あるいは彼らの置かれている社会的状況などについては一様でないという前提で議論を開始すべきであり、ボルガン県のみ状況から一般化することには慎重である必要があると思われる。

一例を挙げれば、筆者が2003年および2004年に現地調査を行ったヘンティ県南部の鉱山町ボルウンドゥル（登録人口8000人：2003年現在）では、ボルウンドゥルを含む行政単位であるダルハン郡の土地で放牧されているボルウンドゥル住民の家畜が3万頭存在すると言われていた。ただし、そこで見られる牧民の来歴および牧畜のパターンについては、周辺地域の牧民が子女の教育の便宜などのためボルウンドゥルに流入し、その家族がボルウンドゥルの郊外で家畜を保持し続けるという構図であり、必ずしも年金支給や失業をきっかけに都市から牧民が析出するという、ボルガン県中心地で見られるパターンは顕著でないようであった（尾崎 2006:216-220）。

もとより、当時筆者が行ったボルウンドゥルにおける調査は開発と都市空間への移住に関する調査であり、都市周辺の牧地における郊外化に着目したものではなかったため、ボルガン県中心地との差異を生じるに至った詳細な経緯を検討することは困難であるが、いくつかの理由を想定することが可能であろう。例えば、都市としての歴史や現在の人口動態が考えられる。ボルガン県中心地は、革命前のダイチン王旗の中心地である「ワンギン＝フレー」に由来し、都市としての歴史は長いが、現状としては特に大きな産業が存在するわけでもない、単なる行政的中心地のひとつであり、近年は人口が減少している。

一方、ボルウンドゥルは蛍石採掘開始とともに1980年代から都市として整備された空間であり、1990年代から2000年代においても、現在進行形で人口増加が継続している（表1）。また、多くの職種で専門的技術が必要なため牧民出身者が直接鉱山業で雇用される可能性は低いとはいえ、鉱山労働者らを

対象とした食料・サービス供給のために各種事業所が稼働している。つまり、都市で吸収できる人口の余裕が両者では異なるがゆえに、差異を生じさせているというシナリオが想定可能だろう。

いずれにせよ、場所により、郊外化のあり方には単一でないパターンが存在することが、この2事例の簡単な比較からも想像されることは確かである。そこで本論では、第3の地域として、社会主義時代に螢石の鉞山町として建設された、現状では小規模な都市空間となっているヘンティ県ベルフの事例を取り上げ、郊外化現象の担い手となる牧民の居住地と来歴、および彼らの現状に関する考察を進めていきたい。なお、本論で提示するデータは後で詳述するように、筆者が2009年8月に行った現地調査で収集したものである。

表1：本論で言及する主な都市における近年の人口動態

	1998年	2002年	2006年
ボルガン中心地	15,562	12,604	12,099
ボルウンドゥル	5,547	6,982	8,510
ベルフ	3,909	3,879	3,890

(モンゴル国家統計局のデータに基づき筆者作成)

地図1：本論で言及する主な地点



ベルフと現地調査に関するデータ

ベルフは、ヘンティ県東部に位置する鉱山町である。現在、人口は約4000人で、そのうち約3000人が都市在住、約1000人が郊外在住の牧民であるという。ベルフはヘンティ県中心地のウンドゥルハーン、前述のボルウンドゥルと同様、モンゴル国政府からは「ホト」（都市）という扱いをされており、通常の「ソム」（郡）からなる行政組織とは別枠の予算措置を受け、ホトの政府も現存している。また景観的にも、通常の郡中心地では見かけることのない、社会主義時代末期（1984年）に建設された3階建てのアパートが20棟ほど立ち並び、電気や水道、また夏以外には湯も供給されているなど、インフラも整備された都市空間である。

しかしその一方で、現在の憲法では「ホト」に関する規定が存在しないため、土地や住民の選挙権などに関連する行政的なステータスとしては、バトノロブ郡の第7バグ（村）という扱いになっており、ホト政府の長の公式的な地位はバグ長である。ただし、この位置づけゆえに、バトノロブに住民登録している牧民がベルフの都市空間の外側¹⁾、厳密にはバトノロブ郡の他のバグに属する草原を実質的に利用可能となっており²⁾、またその背景として、地方選挙においては郡内人口の過半数を占めるベルフ住民の意向が反映されやすいという現実がある。

前述したように、ベルフは螢石鉱山の存在ゆえに建設された都市であるが、旧ソ連の援助に基づいて設立された鉱山会社がベルフで螢石の採掘を行っていたのは、1954年から2000年までである。つまり、現在は企業による採掘は行われていないのであるが、後述するように2008年当時、それに代わる個人採掘がブームとなっていた。なお、以前は地下400mで採掘した螢石をベルトコンベアで大型トラックに積み込んで旧ソ連まで運搬しており、従業員が1000人、町の人口は1万人ほどいたという。当時の町の中心であった鉱山会社の事務所は現在では閉鎖され、向かいにあった文化センターは現在では小学校となっている。さらに先述した3階建てのアパートも、1990年まではロシア人従業員用であったというが、現在はモンゴル人が居住している。

また、2000年にベルフから鉱山会社が撤退した際、従業員の異動先はヘンティ県南部にあり、ロシアのみならず中国まで鉄道のアクセスが存在するボルウンドゥルであったという事実は、2000年以降のモンゴルの経済発展が中国を主たる仕向け先とする鉱山開発に多くを負っている点を勘案すると非常に示唆的である。なお、表1を見る限り、2000年の閉山はベルフの人口動態には決定的な影響は与えておらず、ここ10年ではほぼ横ばいが続いていることが看取される。

さて、1990年代初頭の旧ソ連崩壊に伴い多くのロシア人がベルフを去り、さらに2000年には鉱山会社そのものがベルフから撤退したわけであるが、それは必ずしもベルフにおける蛍石の採掘が停止したことを意味してはいない。筆者がベルフで現地調査を行う直前の2009年7月、純度93%の蛍石鉱石の価格が、2008年にはトン当たり1万5千トゥグルク³⁾であったのが11万トゥグルクに急騰し、突如として蛍石の採掘がブームとなった。ベルフにおいては旧鉱山の西隣、ロシア人の撤退後にモンゴル人が重機で掘ったという深さ30mほどの穴（数箇所）に数10名が入り、手掘りで蛍石を採掘しているほか、ベルフ郊外の草原でも所々、夏営地の傍らに人力で穴を掘って蛍石を採掘している光景が散見された。

彼らは、本来的には金の個人採掘者を意味するモンゴル語の「ニンジャ」という単語を援用し、「蛍石（ジョンシ）のニンジャ」と呼ばれていた。なお彼らの採掘した蛍石は、大型トラックを持った買い付け業者によって買い取られ、ボルウンドゥルへ輸送されているという。なお、ベルフの旧鉱山の近辺で蛍石を採掘している人たちは、筆者が簡単に聞き取りをした限りではベルフの失業者や周辺の牧民などのようであった。

筆者がベルフで行った現地調査は、2009年8月17日～21日の日程で行われたものであり、ベルフのバグ長からの聞き取り調査および15ホトアイルへの訪問を行った。ただし、ホトアイルの訪問においては世帯主の不在などにより、実際に聞き取り調査を行えたのは11ホトアイルのみであった。なお、調査ホトアイルは、ベルフの干草集積ステーションの責任者であるエルデネオ

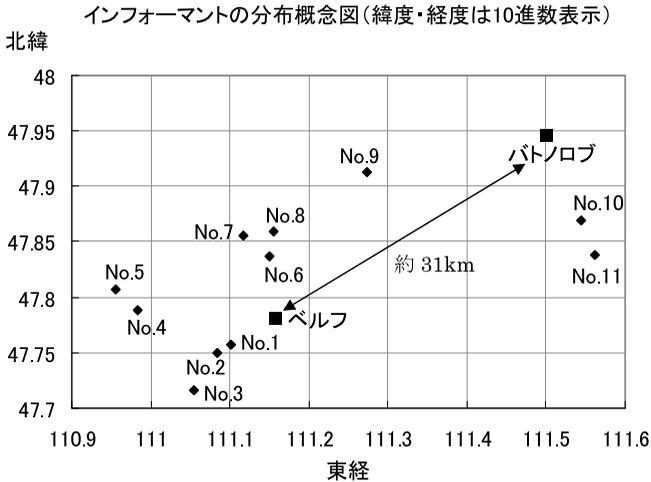
チル氏⁴⁾の選定および道案内によるが、基本的には牧民が集住する地域でのランダムサンプリングである。また、ベルフに関する一般的なデータは、主としてバグ長およびエルデネオチル氏から、統計などの数値データはベルフ政府およびバトノロブ郡政府からもたらされたものである。

なお、本調査は平成21年度科学研究費補助金基盤B（一般）「モンゴルにおける砂塵嵐の遊牧に対する影響評価」（研究代表者：篠田雅人）に関する研究プロジェクトの一環として行われ、データの分析は平成21年度鳥取大学乾燥地研究センター共同利用研究「モンゴルにおける砂塵嵐の遊牧に対する社会的影響評価」の一環として行われた。ベルフは、そもそも2008年5月に発生したショールガ（嵐）で甚大な被害を蒙ったがゆえにプロジェクトの調査地域として選定され⁵⁾、筆者の担当は災害を受けた牧民社会の特性を分析することにあつた。

ベルフにおいてはバグ長からの聞き取りなどから、社会主義時代にはほとんど牧民が存在しなかったことが判明した。これは「ベルフに登録した住民の中に牧民はいなかった」と狭く解釈することも可能であるが、エルデネオチル氏が2008年5月のショールガではベルフ東郊10km圏内の盆地（フンディー）だけで1万頭の家畜が死亡したという事実に言及した際、「社会主義崩壊以後に牧民になった人々が多いから（被害が大きかった）」と付け加えていた点から解釈すれば、やはりベルフ郊外は、多かれ少なかれ郊外化現象によって現在のように牧民や家畜が増加したと理解して差し支えないだろう。

そのため、ベルフ郊外における牧民社会の特性に関する調査は、結果的にその成立過程をトレースする作業が含まれ、その結果として本稿が成立している。ただし、2009年5月に篠田らがベルフ東郊でショールガの被害状況に関する現地調査を行っており、筆者の調査はその追加調査的な役割も負っていた。そこで、5月の調査でも案内役を務めたエルデネオチル氏に極力インフォーマントの重複を避けるよう依頼したため、筆者が調査したホトアイルは、結果的にベルフの西郊と北郊に多くが分布している（地図2）。

地図2：インフォーマントの分布概念図（筆者のGPSデータより作成）



バトノロブ郡におけるベルフ牧民

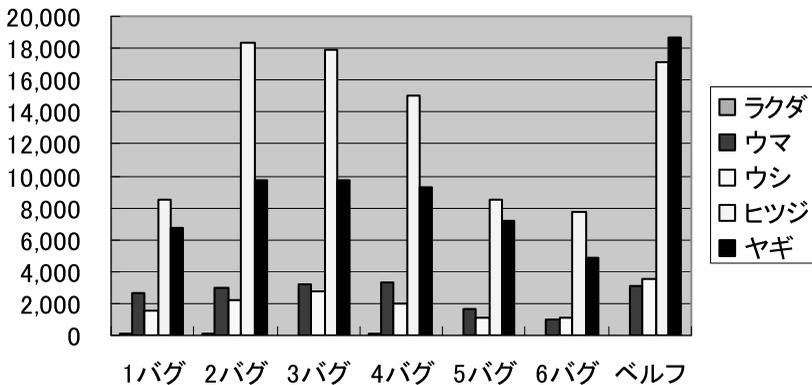
やや話が前後するが、具体的なインフォーマントの分析に入る前に、バトノロブ郡全体におけるベルフの牧民の位置づけに関して、2008年末の家畜頭数および牧民数のデータを利用してさらに検討しておくことにしたい。もちろん、後で個別のインフォーマントに関するデータを見れば明らかなように、平均値を用いた分析には限界が存在することも事実ではあるが、その一方で、全体的な傾向を把握しておくことは、ベルフ郊外における牧畜の特性を明らかにするために必要な作業であろうと思われる。

まず、グラフ1は、バトノロブ郡各バグの家畜数を、畜種別にグラフにしたものである。これを見ると、ベルフは郡内でウシ・ヤギの頭数が最多のバグであることがわかる。また、ウマやヒツジに関しても、最多ではないにせよ、郡内では多くの頭数を有するバグである。なおラクダに関しては、バトノロブ郡が植生的にラクダの飼養に適さない森林ステップに属するため、いずれのバグでも頭数は数10頭レベルと、極めて少ない。特に第6バグに至っては2

頭しか存在せず、ラクダは存在しないと言っても差し支えない状況である。なお、ベルフが公式的に占めているエリアは5km四方であり、そこに牧地はほとんど存在しないため、ベルフの家畜は実際にはベルフの郊外で、周囲のバグの牧地を利用しつつ飼養されているのが実態である。

グラフ1：バトノロブ郡バグ別家畜数

バトノロブ郡バグ別家畜数(2008年末)



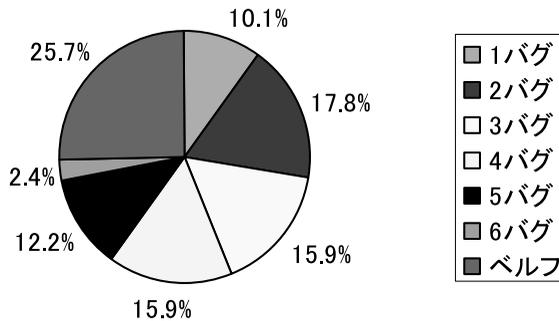
つまりこのグラフ1を見るだけでも、ベルフ近郊がバトノロブ郡内の平均値と比較して異常に高い家畜密度を有することが容易に想像できる。また、家畜の絶対数についても、今日のモンゴル牧畜で高い経済的収益が見込める⁶⁾ウシとヤギをはじめ、全般的に多くの数を有していることが理解できる。

ただし、この家畜数の多さの背景としては、牧民数の多さが影響している側面が強い。グラフ2を見れば明らかであるように、ベルフの牧民世帯数は、バトノロブ郡全体の4分の1を占めている。無論、牧民数と牧民世帯数の比率は完全に一致するわけではないにせよ、他バグと比較して圧倒的に多くの牧民がベルフに集中していることは疑う余地がない。また、グラフ1の家畜数に

ついても、そもそも牧民の多さが寄与している割合が高いであろうことが予想される。

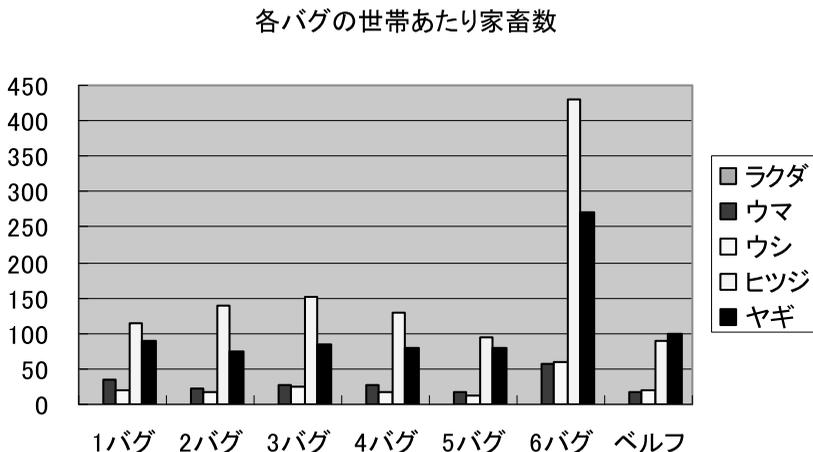
グラフ2：バトノロブ郡牧民世帯数

バトノロブ郡牧民世帯数(2008年末:総数=736)



そこで、各バグの世帯あたり家畜数を算出してグラフ化したものがグラフ3である。これを見ると、牧民世帯数の少ない(18世帯)第6バグの家畜数が突出しているのを除けば、他のバグは平均値としては多寡を論じるほどの差異は少ないと言えるだろう。ただし唯一、ベルフの家畜構成の特徴らしきものを指摘しようとするれば、ヒツジとヤギの比率およびウシとウマの比率であろう。バトノロブ郡内において、ベルフは唯一、小型家畜の中でヤギの頭数がヒツジを上回っており、また第6バグとベルフのみが、大型家畜に関してはウシがウマを上回っている。いずれにせよ、現在の文脈でモンゴルの人々により経済性の高いと考えられている家畜(特にヤギ)が、ベルフでは世帯単位でもより多数飼養されていることがわかる。

グラフ3：各バグの世帯あたり家畜数



このように、ベルフの郊外においては、バトノロブ郡の平均値とはかけ離れた数の牧民世帯が居住しており、その結果として家畜の密度も極めて高いという特徴が指摘しうる。一方、牧畜の経営規模に関しては、むしろ郡内では第6バグが特異な存在であり⁷⁾、ベルフ郊外の牧民は特に家畜数が多いわけでも少ないわけでもなく、また家畜構成については確かに世帯レベルでもヤギやウシの比率の高い点を指摘しうるが、逆に言えばそれ以上の特徴を見出しうる状況にはない。

世帯データの分析

本節では、今回の現地調査で聞き取りを行った世帯のデータのうち基本的なデータを、まず表2として一覧形式で示した後、詳細なデータの補足や分析を行いたい。

表2：インフォーマントの世帯別基本データ一覧

No.	世帯主	年齢	郊外 移住年	旧居住地	旧職業	家畜 (SSU換算)
1	男性（既婚）	60代	1999	ベルフ市街	トラック運転手	1040.0
2	男性（既婚）	40代	1997	ムルン郡中心地	獣医	900.0
3	男性（既婚）	20代	2007	ウルジート郡草原	牧民	504.0
4	男性（離婚）	30代	1982	ホブド県	学生（両親は国営農場）	116.0
5	女性（死別）	60代	1989	ベルフ市街	パン工場（夫は鉱山）	160.0
6	男性（独身）	30代	1997	ベルフ市街	鉱山	306.0
7	男性（既婚）	40代	2001	バトノロブ郡中心地	銀行員	676.0
8	女性（死別）	40代	1992	ダルハン市	会計	352.5
9	男性（既婚）	30代	なし	なし	なし	1626.1
10	男性（独身）	40代	1992	バトノロブ郡中心地	ネグデル運転手	445.0
11	女性（死別）	60代	1991	バトノロブ郡中心地	医者	1465.0

※SSU= Standard Stocking Unit: 換算率はヒツジ1, ヤギ0.9, ウシ5, ウマ6, ラクダ7

インフォーマントの移住歴等に関しては、No.4とNo.9がもっとも特色あるライフヒストリーを有するため、まずは彼らに関する補足を記しておきたい。両者のうち、比較的単純なライフヒストリーを持つのはNo.9である。彼はネグデル末年の1990年より、現在の牧地で牧畜を行っているため、移住歴に関するデータは「なし」としてある。なお、No.9からNo.11までの3世帯は、住民登録はベルフではない。地図1での彼らの居住地のプロットは、明らかに他の世帯よりもベルフから遠くに位置している。非常に大雑把な数字であるが、ベルフから約15kmの範囲が、ベルフに登録している牧民の分布範囲と考えられる。なお、筆者が聞き取りを行った一帯の牧地は第一バグに属しているという。

一方、No.4ははるかに複雑なライフヒストリーを有する。彼はホブド県出身のカザフ族であり、社会主義時代の1982年に、県中心地のウンドゥルハーンに所属する国営農場の労働者として現在の住地へ移住してきた両親に連れられて現住地へやってきた⁸⁾。その後、ウランバートルの大学へ進学したが3年で中退し、1990年にここへ戻ってきた。妻もホブド出身のカザフ族であったが、2007年に妻と娘、妻の両親はカザフスタンへ移住してしまい、現在は弟と2人暮らしである。

なお、彼個人のライフヒストリーは相当に特異ではあるが、ベルフには鉱山関係の仕事をするカザフ族も多く移住しており、No.5も夫婦でカザフ族（ただし調査当時夫はすでに死亡）である。また、上述の国営農場はカザフ系の肉牛を飼養していた経緯から、カザフ族の牧民も存在したという。さらに、社会主義崩壊以降、モンゴル国のカザフ族が相当数カザフスタンへ移住していることも事実であり、その意味ではNo.4は、ベルフ郊外の牧民の「あり得る事例」の一端を担っているといえるだろう。

さて、次に牧民の以前の職業を見てみたい。11事例中、他所で牧民をやっており、その後ベルフの郊外へ移住してきたのは、No.3のみである。彼の来歴は、元々県中心地に近いウルジート郡の出身で、1997年に中学（8年学校）を卒業後、ウルジート郡内で牧畜を行っていたが、早魃を避けるために2007年11月にベルフ郊外へ「オトル」（一時的な移住）としてやってきた。ベルフを選定した理由は、当時妻の兄がベルフの市街地に住んでいたためであるというが、調査時点では、妻の兄も草原で牧民となっているという。なお、No.3は将来的にはウルジート郡へ戻ることを希望している。

No.3を除けば、残りはベルフをはじめとする都市空間か、あるいは郡中心地の定住集落で、多かれ少なかれ専門的な職業に従事していた人々である。その中でも大多数はベルフかバトノロブ郡中心地に居住していた人々であり、彼らが牧民となった場合、その近くで牧畜を行うことはある意味自然である。というのも、彼らにとっては従来の社会的ネットワークから切断されることなく、牧民に転業することが可能だからである。その点において、理由を詳らかにすべき対象はむしろそれ以外の事例である。

No.2は県中心地の西にあるムルン郡の出身者で、1997年まで約10年間、ムルン郡の中心地で獣医の仕事をしていた。1997年に牧民への転業を決意した際、妻の父がベルフ在住であるために現住地で牧民となったという。一方、No.8は1990年に学校を卒業後、モンゴル第2の都市である北部のダルハン市で2年間会計の仕事に従事し、夫（2003年に死亡）も地質学の専門職であった。1992年に社会主義が崩壊して家畜の私有化が行われた際、夫の出身地がバト

ノロブ郡であり、さらに両親が牧民であったため、現住地へ移住して牧民となった。当時、バトノロブ郡ではネグデル構成員でなかった人でも家畜の分配を受けることができたので、No.8の夫も私有化の際に「牧民の子供」として家畜を得ることができたという。なお、現住地は移住当時から変化はないが、ベルフの方が距離的に近いため、子供の入学の利便性を考えて1999年にベルフに住民登録を変更した。なお、No.8はベルフ市街にも住居を所有しており、学校の授業が始まると子供たちはベルフの住居に居住して通学しているという。

ところで、筆者のボルガン県における調査結果から、郊外の草原へ移住して牧民となる元定住民の中には、少なからぬ年金生活者が含まれていることが明らかになっている。そこで次に、年金の有無および、移住タイミングと年金の関連性を検討してみたい。ベルフの調査世帯のうちNo.1、No.5、No.11という、もっとも高年齢層に属するインフォーマントは、全て例外なく年金受給者であった。No.1は1970年代よりベルフの車両基地に所属する大型トラックの運転手であったが、1999年に年金が支給されたことを機会に郊外へ移住、家畜を購入して牧民となっている。

No.5は夫（2008年に死亡）がベルフの鉱山労働者、自身はパン工場の労働者であったが、1989年に夫の年金が出たために家畜を購入して牧民となった。なお、当時は社会主義時代の末期であるが、移住動機として年金が少ないことを挙げていた。また、No.5の営地の周囲には同様に元鉱山労働者で、年金が出たので牧民になったという来歴を持つ人々が他に4世帯ほど存在するという。

No.11は女性であるが⁹⁾、医師を27年間務め、1991年に年金が出たことをきっかけに現住地へ移住して牧民となったという。なお、No.11はネグデル崩壊に伴う家畜私有化の際にも家畜を受け取っているという。このように、ベルフの事例においても、郊外への移住と年金は大きな関連性があることが明らかである。なお、No.6についてはベルフの鉱山、No.7はバトノロブの銀行で働いていたが、いずれも自ら仕事をやめて牧民となっており、年齢的にも若い

ため年金とは無縁である。なお、今回の調査世帯では、No.7のみが2000年以降に牧民になっており、そのほかのケースでは社会主義崩壊前後と1990年代後半に牧民になっていると総括できるだろう。

彼らの家畜数については、SSU換算の家畜数で1000を超えている3世帯のうち、2世帯は年金受給者、そして最多は生牦の牧民と呼んで差し支えないNo.9である。家畜数については労働力や技術の有無と密接な関連があるため、そうした個別世帯の事情を抜きに一般的な傾向を見出すことは難しい。例えば、都市からの距離との相関性についても、確かに最多家畜頭数を擁するグループはNo.9やNo.11といったベルフから距離を置いている人々である一方、それに次ぐグループはNo.1やNo.2の、むしろベルフに最も近い場所に営地を構えている人々である。

続いて、インフォーマントの家畜構成について検討を進めるために、各世帯の家畜構成およびヒツジとヤギの構成比を表3に示す。

表3：インフォーマントの畜種別頭数およびヒツジとヤギの構成比

No.	ヒツジ	ヤギ	ウシ	ウマ	ラクダ	ヒツジ／ヤギ
1	260	200	60	50	0	1.3
2	200	300	20	55	0	0.67
3	250	20	16	26	0	12.5
4	40	20	2	8	0	2
5	83	50	4	2	0	1.66
6	100	100	10	11	0	1
7	150	200	10	40	8	0.75
8	23	25	5	47	0	0.92
9	370	69	85	120	7	5.36
10	150	100	23	15	0	1.5
11	700	300	75	20	0	2.33
総計	2326	1384	310	394	15	1.68
1-8 合計	1106	915	127	239	8	1.21

これを見て判ることは、2008年末のベルフの統計値に特徴的に見られるような、ヤギやウシの頭数が多いという傾向が必ずしも見出せないことである。確かに、ヤギの頭数がヒツジの頭数を上回っている世帯は全てベルフに所属

しており、またベルフ所属の世帯のみでの合計値の方がヤギの相対的多数を示している。しかし、逆にウシとウマの比率に関して言えば、バトノロブ郡に属する3世帯の値を含めたほうが、相対的にウシが多くなる。

もちろん本論で示すデータには平均値や傾向を厳密に論じるだけのサンプル数がないことは事実であるが、表2のSSUとの関連で言えば、No.11が例外的存在であるものの、大型家畜が各世帯の家畜数の中で占める割合が高く、大型家畜の多寡が家畜数の多寡に与える影響が大きいことが想像される。また、現地がショールガの被災地であったことを考慮すれば、災害の影響が多様な度合いでインフォーマントの所有家畜に影響を与えていることが想像されるが、筆者が聞き取り調査を行った範囲では、災害でヤギを多数失った(No.3)、あるいは災害後にヤギを増やしていない(No.9)と、ヤギに言及したインフォーマントが目についたのが印象的であった。

ただし、ベルフのバグ長が有していた2009年6月末現在のベルフの家畜数を示した統計では、ヤギ22,354頭に対しヒツジ21,973頭、ウシ3,788頭に対しウマ3,029頭と、2008年末の傾向を踏襲していたため、調査までの短期間のうちにヤギの売却などが一気に起こったとは考えにくい。そのため現時点では、調査世帯の傾向がそうであった、という理解にとどめておきたい。

一方、調査世帯の季節移動のパターンについては表4に示すとおりである。なお、表4においては、各営地の場所を調査地点であった夏営地を基準にして記述している。また、No.8の「定点なし」とは、営地の場所が年により一定しないことを示している。No.8においては夏営地も定点は存在せず、調査時点の説明でも「今年はたまたまここに夏営地を構えている」とのことであった。

表4：夏営地を中心としたインフォーマントの季節移動パターン

No.	夏営地	秋営地	冬営地	春営地
1	調査地点	—	北 2km	西 1km
2	調査地点	—	北 4km	—
3	調査地点	東 10km	北東 13km	—
4	調査地点	—	南 1km	—
5	調査地点	—	南東 1km	—
6	調査地点	—	北 20km	—
7	調査地点	—	南西 3km	—
8	調査地点	定点なし	南東 30km	定点なし
9	調査地点	—	南 13km	南西 2km
10	調査地点	—	西 8km	—
11	調査地点	—	西 10km	北 3km

※季節移動を行わない営地は「—」で示してある

季節移動のパターンに関しては、ベルフに近いインフォーマントの一部のみ1年を通じて顕著に移動性が低い事例が見出せる一方、少なくとも夏営地をベルフ郊外に構えているからといって、それが直ちに移動性の低さを意味するわけではないことを示唆している。またNo.9のように、冬営地の方がむしろベルフに近接している事例も存在する。ただし、今回の調査データは夏営地を中心に調査されたデータであるため、ベルフ近郊の冬営地を中心とした調査を行った場合、今回とは異なった像を結ぶ可能性が存在する可能性、例えばベルフ郊外に冬営地を構えている世帯は夏営地も郊外から離れない傾向などを見出せる可能性も否定できない。

最後に、ベルフに関する概況で言及した、牧民と鉱山の関わりについて調査データから述べておきたい。今回聞き取り調査を行ったインフォーマントに関しては、調査時点で蛍石の採掘に携わっていたケースは2事例であった。一つはNo.1であり、このケースでは帰省していた大学生の息子が学費を稼ぐために、先述したベルフの旧鉱山に隣接する「穴」へ蛍石を掘りに行っていた。もう一つのケースはNo.6であり、調査の10日ほど前から夏営地の北東200mほ

どの地点に世帯主自らが仲間5人と穴を掘り、家畜の放牧は弟に任せて蛍石の採掘を行っていた。No.6によれば、さまざまの純度のものを合計して1日で200～250kgくらいの蛍石が採れるそうである。なお、No.6の周辺では他にも2世帯が蛍石の採掘を行っており、それぞれゲルの近くに1つずつ穴を掘っていた。エルデネオチル氏によれば、こうした採掘行為に対してはバトノロブ郡政府もベルフの政府も黙認状態である、とのことであった。

おわりに

本論では、ベルフにおける郊外化の実態を、特に原住地と来歴、および彼らの現状に着目しつつ分析を行った。そこで明らかになった点を、筆者の別の郊外調査地、すなわちボルウンドゥルとボルガンとの比較において指摘してみたい。なお、ボルガンに関しては気発論文である尾崎（2008）は基本的に2007年までの調査データで構成されているため、必要に応じてその後の調査データにも言及しつつ議論を進めていく。ただし紙幅の都合により、ボルガンに関する詳細な分析は別稿にて改めて議論することとし、本論においては比較のために必要な最低限のデータのみ提示することとしたい。

まずボルウンドゥル、ボルガン、ベルフの都市としての性格の違いを改めて述べるなら、ボルウンドゥルとベルフが鉦山町、ボルガンは県という行政中心地である。人口規模に関してはボルガンが最大、ボルウンドゥルがそれに次ぎ、ベルフが最小である。ただし、人口変化のトレンドとしてはボルガンとベルフが減少、ボルウンドゥルが増加であり、社会主義時代のベルフは現在のボルウンドゥルの規模をも凌駕する都市であった。

また、すでに挙げたインフォーマントの発言などから、かつてベルフの郊外には都市居住者向けの肉牛の飼育や農耕を行う国営農場¹⁰が存在したこと、あるいは国営農場の近辺には社会主義末期より年金生活者が牧民化していたこと、またNo.9のようにベルフより一定程度の距離を保った草原では社会主義時代より牧民の冬営地などとして利用されていたことが明らかになっている。ただしこれらの点を差し引いても、ベルフの郊外は現在、社会主義時代

には存在しなかったほどの牧民と家畜で満たされているという本論の前提には大きな影響を与えないであろうと思われる。

なおこれは、ボルガンに関しても、郊外にある筆者の調査地にも社会主義時代にはネグデルが運営する都市居住者向けの小規模な酪農場が存在したこと、あるいは筆者の調査地域ではないが南方の郊外に農耕地が存在したこと、また郊外の牧地は本質的に周縁的な牧地であり、少数の家畜を有する都市居住者が夏季のみ使用し、周辺のネグデルに所属する牧民にとっては他にも存在する季節営地の1オプションに過ぎなかったことなど、社会主義時代の状況およびその後の郊外化に関して共通する事項が多い。

一方、ボルウンドゥルに関しては、かつては他の2都市よりも人口規模が小さかったことや、そもそも農業に不適な乾燥した環境であったことから、周辺の農場および都市住民向けの家畜飼養施設ないし組織の存在は確認されていない。また、上述したように、少なくとも筆者の現地調査で知りえた数少ないデータからは年金支給など、何らかの事情で都市から郊外に牧民化して「析出」した事例は確認できていない。この点は、都市の人口動態が増加傾向にあるか、あるいは減少傾向にあるか、というトレンドと関係がある可能性が推測されるが、それ以外にも環境要因なども考慮する必要があるだろう。今後、ボルウンドゥルを対象とした。郊外化をテーマとする事例研究が必要である。

さて、現状としてデータが豊富なベルフとボルガンの比較をさらに進めよう。ボルガンには、特に都市からの移住者を中心とする冬営地が集中する地域が複数存在した。そのうち大規模なものは、13世帯ほどが集住するあたかも「団地」の様相を呈していたが、今回の調査では、ベルフではそれに匹敵するものは見出せなかった。ただし、No.5の周辺で、年金生活者が集住する地域は存在した。無論、No.5や近隣に居住するNo.4がカザフ族である点や、かつては国营農場が存在したという場所の性格を考慮すると即断は禁物であるが、ベルフがボルガンよりも小規模な都市であることを考えれば、これがボルガンのそれに対応する存在であるという推測は可能であろう。

一方、両者の牧畜の現状に関して比較すると、ボルガンはSSU換算では概

算で最高1300、最低75程度となる。ベルフの方が最高値・最低値ともに高いが、最高値に関してはベルフの事例にむしろ「移動型」と呼びうる、従来タイプの牧民が含まれている点、また最低値に関してはボルガンの事例は年金生活者である点を考慮すると、いずれも両調査地点の都市空間との関わり方の差異に起因するものと推測される。すなわち、ごく大雑把に言えば、ボルガンにおける都市との関わり方は、ベルフにおけるそれよりも密である。

この点は、牧民の来歴に関しても同様であると思われる。すなわち、筆者の調査データによれば、ボルガンは20事例中9件が県中心地、1件がボガト、他は遠隔地域からの移住者である。また、移住開始は4分の3が1990年代後半以降となっている。これに対し、ベルフではベルフ市街からの析出者は30%に満たない。また、ボルガンの事例に比べて牧民となった時期が早く、むしろ1990年代前半、社会主義の崩壊期と1990年代後半にピークが存在する。ただし、この違いについては、ベルフの都市としての規模がポスト社会主義期の到来とともに急激に縮小しているため、むしろ「郊外」と考えられていたデータ中に、ネグデル時代の移動パターンを踏襲しつつ牧畜を行うポスト社会主義的「遠隔地」牧畜のデータが混入しているためにもたらされていると理解することが可能であろう。

この可能性については、エルデネオチル氏が、1990年代前半に牧民となり、今もなお筆者の調査事例中ではベルフから離れた地域に営地を構えているNo.11の家畜構成について、社会主義時代の「科学的な」家畜構成比を踏襲していると感嘆している点からも傍証し得るであろう。また今回調査したインフォーマントの所有家畜に、統計値と比べると意外なほど、経済性の高いヤギやウシが多くなかった点とも関連する可能性も高い。あるいは、ベルフの人口規模の小ささ、つまり市場としての小ささも影響しているであろう。

ただしその一方で、バトノロブ郡など、近隣の定住地域に居住していた人々がベルフ近郊で牧畜を開始する、あるいは移住することによって、ベルフにおいても確実に郊外化は進行している。ボルガンとベルフの差は、単にポスト社会主義とポスト・ポスト社会主義というマクロな時期区分の違いのみな

らず、都市の衰退フェーズの発生時期や衰退の速度という、ミクロな動向とも無関係ではないだろう。いずれにせよ、この点については、今後さらなる研究が必要である。

また、上述したような都市の増大と衰退に関して、増大と衰退のいずれのフェーズでも郊外地域の牧民の増加が発生する可能性があるが、現時点では、筆者がたまたま現地調査データを有している、衰退フェーズの2地点での牧民増加のプロセスを明らかにし得たに過ぎない。特に、増加フェーズの最たる地域であるウランバートルをはじめとして、ボルウンドゥル、あるいはウランバートル郊外の炭鉱都市であるバガノールなど、人口が増加している都市空間において、都市の人口増加に伴って発生する郊外化のプロセスについては今後の検討課題である。つまり、ボルガンやベルフの郊外化が都市や周辺の定住地域から析出した人口による郊外化の度合いが高かったのに対し、遠隔地の草原から都市に入りきれず、あるいは元々入る気もなく発生した郊外化の度合いが大きいと思われる事例を検討する必要がある、ということである。

ただし、こうした地域の郊外化プロセスについても、現状としては安易なシナリオの想像は依然として危険であると筆者自身は考えている。というのも、例えば筆者の調査事例において、モンゴル南東部のスフバートル県オンゴン郡からバガノールに移住した年金生活者に伴い、その子供たちがオンゴン郡から家畜を保有したままバガノール郊外に移住し、牧民を継続している事例が存在する一方（2008年夏調査）、モンゴル西部のオブス県での聞き取り調査では、ウランバートルへ移住していく牧民はむしろ中級層以上であり、家畜を全部手放して都市生活者になる傾向が高いというデータを得ている（2005年夏調査）ためである。

無論、両者の違いは、地域や都市空間からの距離の違い、あるいは時期的な違いに起因する可能性は大きい。ただし、郊外化現象が主として都市や定住空間からの析出によって発生するのか、あるいは場合によっては遠隔地草原からの移住が主となるのかという違いは、郊外化現象の一般化・理論化に

においては別のシナリオをもたらすであろう。その意味においても、今後の火急の調査課題は、単に事例数を増大させるだけではなく、人口増大フェーズの都市における郊外化現象の事例研究を、できれば複数の地点において進めることであろうと思われる。

また、今後ベルフにおける蛍石の個人採掘ブームが継続し、ベルフの都市空間が人口増大フェーズに転じる可能性は、現状においては鉱山とは無縁のボルガンにおいて人口増大が発生する可能性と比べれば高いと想像される。あるいは、ベルフの郊外も含めて広域的なエリアが鉱山化する可能性も否定できない。仮にこうした状況をベルフが迎えるとするれば、郊外の牧民の動向についてはベルフとボルガンではいかなる差異が発生するのか、あるいはボルウンドゥルなど他地域の鉱山町でもベルフと同様の現象が発生するか、といった点についても継続的な注目が必要であろう。

注

- 1) ベルフのバグ長によれば、ベルフの領域は5km四方であるとのことであった。また北は第1バグに、南は第5バグに隣接している。
- 2) 筆者が聞き取りを行ったインフォーマントの中には、バトノロブ郡に対して当地の登録を行っていない牧民も存在したため、まさに「実質的に利用可能」と言いうる状況であった。またバトノロブ郡内では、ベルフに限らず一般的にバグ境界を越えての放牧が認められているとのことであった。
- 3) 2009年2月末現在の相場で、1円 \approx 16トゥグルクであった。
- 4) 後述する研究プロジェクトのモンゴル側メンバーである、モンゴル国非常事態本部のアマルサナー氏の紹介による。なお、干草集積ステーションは非常事態本部の管轄下にある。
- 5) ショールガによる災害の報告に関しては尾崎（2010）を参照。
- 6) ウシに関しては都市近郊であれば牛乳の売却による収益が、ヤギに関してはカシミアの売却による収益が見込めるため、生体売却でしか収益の見込めないヒツジに比べて経済性は高い。なお、ウマについても馬乳酒を売却すれば少なからぬ収益が見込めるが、現実には自家消費分が多く、ウシやヤギほどの経済的利益は得られないのが一般的である。

- 7) 第6バグの位置および社会的背景について、今回の現地調査では明らかにできていないが、一般的なバグのナンバリングは数の小さいほうが一般の牧民バグで、大きくなるとバグ中心地、都市空間など特殊性を持つバグが配される傾向が存在する。現に、バトノロブ郡においてもベルフは第7バグ、第5バグは1970年代にバトノロブ郡に吸収合併された旧イデルメク郡である。この事実から類推しても、第6バグが一般的な牧民バグでない可能性は高く、郡中心地、あるいは別種の特殊な空間である可能性が疑われる。
- 8) ホブドからベルフの移住年は1978年であるというが、1982年までのNo.4の両親の職業については確認しなかった。
- 9) No.11の夫の死亡年齢については未確認である。
- 10) 農耕地の存在についてはエルデネオチル氏およびNo.11の指摘による。

参考文献

尾崎孝宏

- 2006 「モンゴル国東部牧畜地域における開発と移住」伊藤亜人先生退職記念論文集編集委員会（編）『東アジアからの人類学—国家・開発・市民—』、風響社、207-222ページ。
- 2008 「モンゴル牧民社会における郊外化現象—ポスト「ポスト社会主義」的牧民の出現に関する試論」高倉浩樹・佐々木史郎（編）『ポスト社会主義人類学の射程』（国立民族学博物館調査報告No.78）、481-499ページ。
- 2010 「モンゴル国の自然災害に関する報告書の分析—2008年5月の「シヨールガ」を例に」『鹿大史学』57:9-23。

本稿は、平成21年度科学研究費補助金基盤B（一般）「モンゴルにおける砂塵嵐の遊牧に対する影響評価」（研究代表者：篠田雅人）、および平成21年度鳥取大学乾燥地研究センター共同利用研究「モンゴルにおける砂塵嵐の遊牧に対する社会経済的影響評価」の成果の一部をなすものである。